



全ての人が支え合い、安心して働き暮らせるコミュニティの実現

SENZOKU vol.26

洗足

ヨハネによる福音書13章
「イエス弟子の足を洗う」



日本聖書協会発行「アートバイブル」より

13章 8節：ペトロが、「わたしの足など、決して洗わないでください」と言うと、イエスは、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と答えられた。



真生園 秋の芋掘り

CONTENTS

1. 巻頭言 P.1
2. 神戸愛生園
看取り前支援の取り組み P.2
3. 第4期中期計画の
体制と展望
 - ▶ 理念理解定着部 P.3
 - ▶ 職員育成推進部 P.3
 - ▶ QOL推進部 P.4
 - ▶ 経営強化推進部 P.4
 - ▶ 地域貢献推進部 P.5
 - ▶ 人事・労務・危機管理推進部 P.5
4. 勤怠管理システムと
WEB申請機能追加 P.6
5. WLBの取り組み P.6
6. 友が丘総合事業の
進捗と構想 P.7...P.9
7. 常務のぼ・や・き P.10
8. 牧師メッセージ P.11

社会福祉法人 神戸聖隷福祉事業団

〒654-0142 兵庫県神戸市須磨区友が丘1-1 TEL:078-792-7555 FAX:078-795-4511

<http://www.kobeseirei.or.jp>

「待つ」ということ

社会福祉法人 神戸聖隷福祉事業団

理事長 水野 雄二

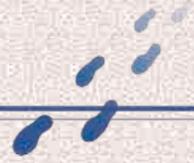


新型コロナウイルスとの遭遇から始まった2020年も年の瀬を迎えようとしています。師走と言えば「クリスマス」。キリスト教ではクリスマスまでの4週間を「アドベント」(待降節)として心穏やかに過ごします。その意味は文字通り、救い主イエス・キリストの誕生を待ち望む期間ということですが、ここでは「待つ」ということに大きな意味がありそうです。

私たちがいつも何かを待っています。「今度、〇〇さんが訪ねてきてくれる。」「今度の日曜日には〇〇を買いに行こう。」「今度の連休には〇〇まで旅行に行こう。」「〇〇さんのメールが返ってこないな。」等々、いつも〇〇に示されたような何かを待っているのではないのでしょうか。でも、それがなかなか叶わないとき、哲学者の鷲田清一さんが「現代は、待たなくてよい社会、待つことができない社会になった。」(『「待つ」ということ』)と言われるように、「待つ」ことは楽しみであると同時にストレスの溜まる苦痛にもなるのです。

コロナ感染への不安や緊張が長期化し、その終息は依然として闇の中です。私たちはいつまでその終息を待たなければならないのでしょうか。ワクチン開発や特效薬の発明も遠からず実現するのでしょうか、多くの苦しみのある方々には待ち遠しく、待ち焦がれ、待ちくたびれる状況が続きます。いつまで「待て」と言うのでしょうか。

しかし、鷲田さんは「意のままにならないもの、どうしようもないものへの感受性を私たちはいつか無くしたのだろうか。自分を越えたものに付き従うという心根をいつか喪ったのだろうか。」と言われます。「待つ」ということは希望に支えられるのです。マスクを外して、みんなでワイワイ言いながらご飯を食べ、親しく肩寄せ合って語り、大声で歌を歌う。そのような当たり前のことを普通に行なうことができる日を待ちたいと思います。「待つ」ということ、つまりみんなで励まし合いながらそんな小さな当たり前を希望するということが小さな「福祉」なのではないか、と思うのです。



「支え」を知り、寄り添うということ

神戸愛生園 支援課長 山崎 浩司



神戸愛生園基本方針に掲げる「その人らしい生活を送ることができるよう支援する」には何が必要か。この課題に対して、「成育歴をふまえ、QOLの向上を目指し、終末期に寄り添う。」を事業計画に掲げ、現在までに6名のご利用者に対してご本人、ご家族や関係者との面談を実施。面談準備のため、新たに「人生ノート」、「体調急変時に希望すること(意思確認書)」の作成、担当支援員は過去30年以上のケア記録を読み返すこともありました。

これらの取り組みを通じて、今まで知らなかったご利用者の姿やご家族の想いを知ることができ、そのご利用者の言動の背景、大切にしている「支え」を知ることができました。一人ひとり違う「支え」を支援員として知っていること、その「支え」に寄り添い、共に大切にすることが「その人らしい生活を支える」ことに近づくことではないかと感じ、私たち「生活支援員」は、単なる介護職員ではないと強く思うようになりました。その結果、ご利用者の人生の歩みを想像、共感して支援を展開しようとする気運も生まれつつあります。

この取り組みは時にご利用者、ご家族の辛い過去の蓋をこじ開けるような場面も生じます。そこに向き合うには誠実で謙虚な姿勢、確かな技術・想像力、支援者としての覚悟を必要とします。だからこそ、そこに支援者としての「本質」があると信じ、ご利用者やご家族の想い、支えに寄り添いながら伴走できる私たちを目指して取り組みを続けていきたいと思えます。

2020年 月 日作成

人生ノート

ご利用者名: _____ 作成者(担当支援員): _____

この人生ノートは、これからの人生をご本人が「どうしたいのか」を聞かせて頂き、神戸愛生園として「共に考える」ために作成しました。ご本人の思いを遠慮なくお話しいただき、また、私どもからも支援者としての思いも伝えさせていただき、「その人らしい人生」を応援させて頂きたいと考えています。

①これからの目標や希望について、お教えてください。

②「これからの目標、希望」の背景にある思いについてお教えてください。
例: 生まれた所からの生い立ち(幼稚園→小学校→中学校、お仕事・・・等)
好きな事、嬉しかった事、得意な事、苦手な事、嬉しかった事・・・
ご家族への思い・・・等

人生ノート

体調が急変した時に希望すること【意思確認書】

神戸愛生園では、定例一、体調の急変により、ご本人の意思や判断能力の回復が見られない状態(終末期)になった場合にも、ご本人の意向が尊重され、できる限りご本人にとっての最善がはかれることによる責任・重責に鑑み、このような意思確認書を作成させて頂いております。また、現在の神戸愛生園の状況・体制の中で、願っていることに対応できない場合もあります。この場合は改めて確認をさせて頂きますが、可能な限りの対応をさせて頂き、ご本人・ご家族共に納得が、事ご本人・ご家族に比べておられるよう努めていきたいと思っておりますので、申請をお手持ちを御検討頂けましたら幸いです。なお、この意思確認書は半年に一度、再確認します。それ以外でも、お気持ちに急変が生じた際はご連絡をお申し出ください。

1. 体調急変時に最も望まれることは何ですか？(人として、誰の性根、ご家族は、等)
 ご本人の思い
 ご家族の思い

2. 病院療法となった場合、どのような治療を望まれますか？
 人工呼吸器、心臓マッサージ等の生命維持のための最大限の治療を希望する
 人工呼吸器は希望しないが、高圧リリー輸液や胃ろうによる精神的な苦痛緩和を希望する
 継続的な痛み緩和は希望しないが、食事などによる水分補給は希望する
 ご家族が決められたまで治療を続けるための対応をして頂き、その後は治療停止による生命維持も「行わず、自然に安眠を望みたい」
 治療の判断を家族がしなくていい に従う

3. 終末期や臨終判断が難しくなった場合に望むごしたいご希望はどのくらい？
 自由に聞きたい
 受け入れない、他の施設へ転院(終末期の対応可能な施設)
 長期療養型介護施設等へ転院
 ご家族施設・地域を記載して下さい

利用者 氏名 _____ 年齢 _____ 年 月 日

家族代表人氏名 _____ (印) _____

担当支援員氏名 _____ (印) _____

職務 氏名 _____ 姓 _____ 氏名 _____ 姓 _____

意思確認書

第4期 中期計画の体制と展望

第4期中期計画(2020～2022年度)の新たな3か年がスタートしました。「だれもがその人らしく輝ける地域社会の実現に尽くします」というビジョンの実現に向けて取組む各推進部の展望とメンバーをご紹介します。

理念理解定着部

第4期中期計画の6か月

キリスト教使命に基づく法人基本理念は、クリスチャン人口の少ない日本において、とっつきにくさがあり、キリスト教価値観と出会い、親しむことは法人にとって重要なチャレンジです。そのために部会では「より分かりやすく、親しみやすく」をモットーにいくつかの取組を行っています。コロナ禍で海外研修など計画通りにいきませんが、それでも理念研修の機会をもつこと、理念ハンドブックや職員報など目に見えるツールを提供することに力を入れています。また、特に創業50年をめざし、その間に深くかかわった方々のmy story収集など理念が具現化されている記録収集に努めているところです。今後も神戸聖隷ミッションの深く広い浸透に向けて地道な歩みが続けられていきます。



部長(理事長)

水野 雄二

理事長5年、理念理解定着部会担当4年、まだまだこれからです。

神戸聖生園 施設長 西郷 昌一

皆様にわかりやすい理念理解の情報提供に努めていきます。

神戸明生園 施設長 山本 隆志

理念について思い巡らす機会をいただいています。

和生園 施設長 松本 雄二

今期中期計画から、理念理解定着部会に所属になりました。どうぞよろしく願いいたします。



職員育成推進部

離れていても繋がることはできる

採用活動を中心とした「人材確保」と研修を中心とした「人材育成」を二本柱とした取り組みについて、前半はそのどちらも当初の計画を根本的に見直しが必要となる難しい状態でした。対面式のリアルな空間を共有する方法から、webでの画面を通して共有する方法へのシフトが求められ、試行錯誤を繰り返すなかリアルな形に頼り過ぎていたことも、工夫によって新たな方法もあることに気付かされました。しかし、やはりリアルな体験がもたらす効果は大きいと、今後は両方を状況によって使い分けることを目指したいと思います。そして「人材」を「人財」として捉え育てていくためには、他の部会との連携も不可欠であり、部会間での繋がりを通じて「良い人材を育て」「そのような人が定着する」ことで「新たな良い人材が集まる」、そして「さらに良い人材として育て・・・」といったループを目指します。



部長(理事)

有川 洋司

「人材」というとても重要なテーマに自分を見つめ直す日々です。

恵生園 施設長 ^{かもん} 掃部 久美代

明るく楽しい職場が大好きです。時代の流れと共に働く方々の価値観も変化しています。今後求められる人材育成を考えながら、やりがいのある職場づくりを目指します。

ワークセンターひょうご(中部在宅障害者福祉センター)

所長 森崎 康文

職員育成は、必要不可欠な課題ですが、難しさに困惑しています。

神戸友生園 施設長 井上 待子

「新たな生活様式」になり「新たな研修方法」を模索中です。

法人本部 富士谷 治彦

イエスは、「わたしについて来なさい。人間を取る漁師にしよう」と言われた。

QOL推進部

凄い半年でした

QOL推進部の今期目標の「すべての人の居場所をていねいに作り、安心安全な生活を目指します」に相反するような半年でした。4月からご利用者の直接支援の方法を模索しながら、生活の質を保つ方法を探ってきました。WEB会議でメンバーとの打合せを重ね、ご利用者が利用している事業所が、私たちの介護力や支援力を高め、評価しご利用者のQOL向上を図るにはと、模索しています。今年度下期での満足度調査、虐待防止などいろいろな取組みの結果をこれからは活かしていきたいと考えています。



部長(理事)

種谷 啓太

雲海で有名な竹田城の麓で仕事をしています。が雲の上に登る気にはなりません。

真生園 施設長 大橋 幸司

今年度、QOL推進部担当となりました。ご利用者のQOL向上を目指し頑張ります。

エスポワールこじか

施設長(理事) 伊崎 辰夫

今年度経営強化推進部からQOL推進部へ異動になりました。微力ながら第4期計画が前向きに進むよう働きます。

自立センターひょうご

施設長 大森 陽子

法人内各施設のサービスの質の向上のための取り組みを進めていきたいと思っています。

神戸愛生園 施設長 加藤 航

サービス向上の力になればと思っていますが、なかなか難しい分野です。

経営強化推進部

電子印鑑決裁・ペーパーレス化への取り組み

経営強化推進部は第4期中期計画の重点実施項目に「ICT化等による業務の効率化・省力化」を掲げ、介護用ロボット等先進福祉機器の現場業務への更なる整備を推進すると共に、事務的業務の視点では、ワークフローシステム導入による稟議書等の電子印鑑決裁、ケース記録等利用者支援に関する各種帳票の電子印鑑決裁・ペーパーレス化に向け準備を進めています。

①複数人を経由する書類への捺印業務減による新型コロナウイルス等への感染リスク回避、②決裁のスピードアップと捺印・書類管理業務の効率化、③各種書類の印刷減による印刷コスト削減、④電子文書保存による書類保管スペースの削減を目的に、年度内の早期実現を目指しています。



部長(理事)

西山 充

「常に絶えず少しづつ」をモットーに、ポジティブに取り組めます！

神戸光生園

施設長(理事) 吉本 ひろみ

業務効率化・ペーパーレス化を神戸聖隷に取り入れ円滑な処理を目指します。

ひょうごデイサービスセンター

施設長 大嶋 信幸

チームで力を合わせ時代の流れに沿った経営強化に取り組めます！

さくらの苑 総務課長 小林 剛

部会2年目です。一生懸命頑張りますのでよろしくお願い致します。

平生園 施設長 太田 敦子

第4期より部会に仲間入りしました。役割を果たせるよう努めます。

法人本部 総務課長 小紫 義也

より良い法人経営に繋がるよう一つ一つ丁寧に取り組んでいきます。



地域貢献推進部

希望の光を見つけて挑戦していこう

2020年度は推進部メンバーチェンジを経て、第3期中期計画で取り組みに至らなかった課題を継承しながら、「誰もがつながり支え合う地域の実現」を目指し、第4期中期計画1年目をスタートしました。

上期は地域の行事やイベントがほぼ全て中止になり、私達にとっても出口の見えない状況でした。竹田地区で建設中の新事業「めぐみ」と、神戸地区でも同じく建設中の須磨区友が丘の「神戸聖隷オアシス」は、私達にとっても希望の光の一つです。

「誰もがつながり支え合う地域の実現」を考える中で、地域に暮らす皆さまが「相互に支え合う」関係構築について探っていく取り組みを続けていきます。



部長(理事)

加藤 成久

年齢を重ねるごとに、「相互に支え合う」ことを実感、それによって私自身が生かされていることに気付かされています。

さくらの苑 施設長 小山 哲也

地域貢献部会但馬地区のメンバーとして地域の方とのつながりを大切にしていきたいと思います。

せいれいやさかだい

施設長 岩井 誠一

地域貢献に境界はないと考え、誰もが安心して過ごせるようなお手伝いが出来ればと思います。

ワークセンターわかまつ

施設長 木南 仁

小さなことからコツコツと…地域に情報を発信できるように頑張っていきたいと思います。

すま障害者地域生活支援センター/神戸聖隷総合相談センター

施設長 三木 卓也

第3期(2017~2019)から継続して地域貢献部会を担当させていただいています。よろしくお願いいたします。

人事・労務・危機管理推進部

新たな「ワーク・ライフ・バランス」への取り組み

今回は部会での「ワーク・ライフ・バランス」の取り組みの一部を紹介させていただきます。

第4期中期計画では、実行計画の一つとして「働きやすい環境改善とアピール」に取り組んでいます。2021年度に「くるみん認定(仕事と育児両立支援)」と「えるぼし認定(女性の活躍推進)」、2022年度に「ユースエール認定(若年層の採用・育成活動)」の取得を目指しています。

今後は、各認定を取得するための条件を満たすべく、引き続き働きやすい職場環境の整備に努めるとともに、旧来の職場風土の改善にも取り組んでいきたいと思っています。



部長(常務理事)

吉田 和夫

福祉人材の確保に向けて正規と非正規の壁を壊したいと行動しています。

北但広域療育センター

施設長 久木田 憲彦

「多様な働き方と適切な処遇制度の整備」をめざし、無い知恵を絞りだしています。

法人本部 事務長 村山 盛光

働きやすく、働きがいのある職場の実現を目指して力強く取り組んでいます。

法人本部 総務課長 小紫 義也

「ワーク・ライフ・バランス」推進に向けて、一つ一つ丁寧に取り組んでいます。

神戸明生園 総務課長 奥藤 正登

今年度から当部会に参加しています。よろしくお願いいたします。



勤怠管理システムとWEB申請機能追加

人事・労務・危機管理推進部
(法人本部 総務課長) **小紫 義也**



人事労務危機管理部会の取り組みで2019年8月に勤怠管理システムを導入してから約1年が経過しました。昨年度は主に給与計算連動部分の勤務スケジュール・打刻情報集計の導入が中心でした。今年度は勤怠管理システム活用拡大として「WEB申請機能」追加に取り組み、2020年12月から本格稼働します。休暇届や超過勤務申請など勤怠に関わる届出をWEB申請化することで、労務管理向上及び給与事務担当者の負担軽減をさらに推進したいと考えています。

WLBの取り組み

「ひょうご仕事と生活の調和推進企業宣言」について ～神戸聖隷福祉事業団のワーク・ライフ・バランスの取組～

人事・労務・危機管理推進部
(法人本部 事務長) **村山 盛光**

皆さんは兵庫県に本社がある有名企業と聞けば、どのような企業を思い浮かべますでしょうか。

例えば、モロゾフ株式会社、プロクター・アンド・ギャンブル・ジャパン株式会社、カネテツデリカフーズ株式会社、川崎重工業株式会社、生活協同組合コープこうべ、フジッコ株式会社などが思い浮かぶかと思います。そして、これらの企業はいずれもひょうご仕事と生活センター*の「ひょうご仕事と生活の調和推進企業宣言」に登録を行い、仕事と生活の調和「ワーク・ライフ・バランス」の推進に積極的に取り組まれている会社でもあります。

当法人でも「ワーク・ライフ・バランスコンサルタント」の養成、有給休暇取得率向上の推進等で「ワーク・ライフ・バランス」の推進に一定の成果をあげてきましたが、さらなる推進を図るべく、上記企業も取り組むひょうご仕事と生活センターの「ワーク・ライフ・バランス認定企業」の取得を目指すこととし、この度「ひょうご仕事と生活の調和推進企業宣言」に申請登録を行いました。認定されることで、以下の効果が期待できます。

- *認定企業としてひょうご仕事と生活センターのホームページ等で法人名と取組が広く周知されイメージアップに繋がる。
- *ハローワークの求人票や求人広告でPRができ、人材確保に期待ができる。
- *業務効率や生産性の向上が期待できる。

当法人は事業数も多く、勤務形態、勤務体制も様々ですが、それぞれの事業所の実情にそった、着実な取組により認定をめざしたいと思います。

*ひょうご仕事と生活センター：企業に人材確保や業務効率の向上をもたらす、勤労者に働く意欲や働きがいをもたらす「仕事と生活のバランス」の取り組みを全体的に推進する拠点として、兵庫県が、連合兵庫、兵庫県経営者協会との協働により設置したもので、「公益財団法人兵庫県勤労福祉協会」が運営している。

今後は認定をいただけるよう
取り組みを推進していきます

登録証が
届きました！





友が丘総合事業について ～神戸聖隷オアシス誕生に向けて～

地域貢献推進部 部長 加藤 成久

神戸地区の友が丘エリアの施設長で構成した準備会で約6年間「地域の方々との共生の場づくり」をテーマとして話し合い、立ち上げた「友が丘総合事業」は、「神戸聖隷オアシス」となり、3階建てビルの建設を進めています。

「神戸聖隷オアシス」の事業計画の根幹には以下の4つのテーマを据えています。

- ①地域につながる事が困難な方々が集う場になること
- ②地域の方々の交流サロンの場を創ること
- ③地域の包括的相談の場になること
- ④障害がある方々のグループホームを作ること

これらを踏まえ、1階では地域の皆さまに利用していただけるスペースと包括的相談の場、2階では社会福祉事業として多目的な作業等活動の場、3階では重度障害者のグループホームを展開させていただきます。それぞれの事業については、担当者を決めて、2021年4月の誕生に向け準備を進めています。



「神戸聖隷オアシスの設計に込めた思い」

株式会社黒田建築設計事務所 浜田 洋光・芦口 賢史

2017年9月に建物の中に入る事業構成の打合せに参加させていただきました。広い敷地内の中央部に位置する建物ですが、当初から、いかに地域に開かれた、利用しやすい施設にするかを皆さんと熱く議論させていただきました。

まず外観デザインで留意したことは以下の内容です。

- 1階は、誰でもが気軽に立ち寄り、利用できる「だれでも食堂」
- 2階は、多目的活動スペースや法人本部事務室
- 3階は、知的障害者のためのグループホーム

様々な機能を盛り込んだ複合施設として、内部機能をそのまま外部に表出させ、多様性を表現しました。そのため、一般的なアルミの縦格子手すりやALC(軽量気泡コンクリート)の腰壁手すりの構成とは区別し、各階主要室前のバルコニー部には、不透明ガラスパネルの手すりや、外観上のアクセントとして、着色された押出セメント成型板のマリオン(外壁を構成する縦枠:縦ストライプ)が取り付けられ、さらに1階ピロティ部のアルミパネルで仕上げられた部分には、半屋外空間のテラス等が整備されています。

また平面計画上の配慮として、1階は、メイン玄関と別に外部に開けた6枚引違いの大きなガラス建具を設け、どこからでもアプローチし易いように工夫すると同時に、移動間仕切り(2か所)や、4枚引き込み建具(1か所)などの採用により、部屋の大きさの可変性を通して様々な利用に応えられるように配慮しています。さらに、屋根のかかった屋外テラスは、内外が連続したバリアフリーな多目的空間となるように工夫しています。あと中央に配置されている厨房は、本施設の“セントラルキッチン”として「食」による様々な交流の一翼を担えるように設計しています。

2階は、本部事務所と多目的活動スペースといった、用途の違う部屋が隣り合って配置されていますが、スペースの効率化を図りながら、それぞれ求められる機能をきっちりと確保できるように配慮しました。また作業活動場所と食堂場所を分けたり、また一体的に使えるようにするため、移動式間仕切りを設置しています。

3階のグループホームは、4人のユニットを基本に、個室・浴室・トイレ等必要な諸室を確保して、自立した生活を目指すと共に、中央部には、食堂、キッチン、支援人室など管理部門を配置し、業務の効率化を図っています。

最後に、この計画の工事内容の説明の際に、北須磨団地自治会員の方とお話しをする機会がありました。その時に「友愛館(神戸愛生園)のプールが使えた頃、子供たちとよく泳ぎにきたので、子供たちは障害を持った方に全然抵抗がない」と伺いました。このことから、この施設を通じて、障害をもった方をはじめ、老若男女あらゆる人々の間に自然に交流が生まれ、建物のバリアフリーと合わせ「心のバリアフリー」が街全体、社会全体に広がってくれることを願って止みません。



1F 神戸聖隷総合相談センター

すま障害者地域生活支援センター
神戸聖隷総合相談センター 施設長 三木 卓也

神戸聖隷総合相談センターは、神戸聖隷の目指す地域共生社会の実現に向けて、地域福祉ニーズに対応したセーフティネットの役割を果たすことを本来的な命題の一つとして2016年4月から事業を開始しました。

日頃は、主に当法人各施設のご利用者約290名の「計画相談支援サービス」（サービス等利用計画の作成）を通じて、福祉サービスの利用に関する相談や利用調整、親なき後の生活に向けた備え等、生活全般にかかる身近な相談窓口として支援をさせていただいております。

事務所移行後は 同フロアの地域交流スペースでの活動と有機的に連携して、地域で必要とされる福祉ニーズを丁寧に把握し応えることに取り組んでいきます。

ピカピカの新しい事務所で、職員一同、フレッシュな気持ちで頑張っていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

1F 地域交流スペース

「Tunagari ～あつまり処（どころ）～」

神戸友生園 施設長 井上 待子

地域貢献の一つとして検討が始まったこのスペースでは、地域民生委員の皆様から意見を聞かせていただきどのようなスペースにするのか話し合ってきました。「Tunagari～あつまり処（どころ）～」は近隣地区の孤食の子ども達や、忙しく働く親御さん、日中おひとりで過ごされているお年寄りなど、年齢や家庭環境に関係なく集まっていだける**処（ところ）**、また地域の皆様に気軽に寄っていただけるサロンのような**処**、そして相談支援の職員と協力してよろず相談をお受けできる**処**を準備します。

具体的なサービスとしては、だれでも利用していただける食堂を目指します。この食堂は、就労訓練系施設の実習先として活用し、ワンコイン定食を数量限定で提供します。その他、缶詰バーや軽食自販機なども設置し、地域の皆様はもちろん、友が丘敷地内のご利用者にも楽しんでもらえるような**処**を提供します。また、食堂奥のスペースは、会議や研修場所として利用できます。分割利用もできる研修室で、法人内外の会議や研修、また地域に向けたプログラムの開催**処**を提供します。

2
F

2F 多機能・多目的室

神戸聖生園 施設長 西郷 昌一



2階の多機能室についてご紹介します。部屋の広さは何もしない状態で65㎡、10人くらいのグループ活動には十分です。パーティションを利用して、ご利用者のご希望に応じた一部屋利用も、2分割での利用も可能となります。また、付属設備として簡単な調理場・小部屋・バルコニーがあって、個人やグループといったご利用者の多様なニーズに多彩に対応できる多目的、多機能な日中活動場所を提供します。

新しく与えられたこの場所が、ご利用者にとって安全で安心できる場となるよう願っています。

2F 法人本部

法人本部 事務長 村山 盛光

今まで神戸友生園の一室を事務所としてお借りしていた法人本部ですが、この度の神戸聖隷オアシスの建設にともない、2階に移転することになりました。今までご来所いただいてもお通しする場所もなく、お客様、そして神戸友生園のご利用者、職員にご迷惑をお掛けしていました。今回、理事長室・事務室に加え面談室も設けましたので、ご相談等ございましたらご遠慮なく来所いただければと思います。

3
F

3F グループホームのぞみ

安心に暮らせる「グループホームのぞみ」を目指して

せいれいやさかだい 施設長 岩井 誠一



グループホームのぞみは重度の障害がある方が地域で安心して暮らすことができるよう、2021年4月1日開所を目指し準備をしています。

そのようなグループホームが求められていながらも、充実した支援を継続することが困難なため、なかなか設置に至っていない状況でありました。神戸聖隷としても設置を模索していましたが、実現させることの困難さに頭を抱えていました。しかし地域の理解と関係各所の協力により具体的に着手することができました。

このグループホームがご利用者の地域生活の場所として「のぞみ」となるように希(こいねが)い準備を進めて参ります。皆様の温かいご支援のほどよろしくお願い致します。



「コロナへの一人一人の良識と 社会の良識」

初めから「コービット19」と呼べばよかったのに、一般人にはなんで「新
型」とつくのかわからない件の呼称を使ったため、オーストラリアの同名の
少年がウイルスと呼ばれる災難にあっていて、それを知った有名俳優から「太陽の周りの
光の輪のような名をもった唯一の少年だ」という手紙とスミス・コロナ社製のタイプライターが送られてきた、と
NHKニュースで知らせていました(4/24)。この災厄をこの少年がどんなふう乗り越えられるかわかりません
が、名前の通り輝き、世を照らす人になっていかれたらいいと思います。

なぜこんなに不安なのでしょう? 「うつる」ということは忌避すべき事態だと、これほど意識したことがなかっ
た。世界に誇る医療保険制度のあるわが国では、体調不良ならかかりつけの診療所を気楽に受診することがで
きるはず。ところが今回は、病気の気配を感じるのに病院に行けないというだけでも不安なのに、発熱が
あって強いだるさや息苦しさを感したら「全国536か所の帰国者・接触者相談センターが24時間対応」と言
われても…。その先は隔離してECMO(エクモ)、人口肺とポンプでの生命維持ということですから、強い恐怖を
感じました。社会が目指す「安心と安全」はどこかに隠れてしまい、そして同時にこの恐怖が、陽性の「同胞」を罵
倒するようなことにつながるというしんどい現実も生み出しました。

さて、いま、介護施設や福祉施設の職員のPCR検査が、行政主導で実施され始めました。しかし保健師さんによ
ると、PCR検査で陽性と反応した後は、医師の診断で無症状であっても2度目の検査は無いそうです。そうす
ると検査の結果、「宿泊療養」(今後不可能になると思える)が求められる職員が判明したらどんなことになるの
でしょうか。

クラスター対策が日本の戦略と伺っていますので、絨毯作戦のような一斉検査で事前にクラスター要因を叩く
という考え方なのだと思います。しかし、これでは介護・福祉施設の機能が、社会全体として維持できなくなり
はしないか心配でなりません。尾身茂新型コロナウイルス感染症対策分科会会長は「5人の感染者のうち4人は他
人に感染させない」とおっしゃっています。1回きりの検査よりも、症状がある人、濃厚接触の可能性のある人、ク
ラスタにかかわっている人にこそ徹底的な検査をするべきだとも(日経ビジネス10/16Web版)。

当地の知的施設の連盟では当初、体調に変化が生じた職員のPCR検査体制の構築を所管庁と話し合ったと聞
いていますが、その検査結果に沿って、公的費用の投入の上で関係施設の一部機能停止などのルールを共有す
るほうが、疫学的に合理性があり、かつ社会的な福祉施設機能を混乱させることにつながらないのではないで
しょうか。

そんなことを思っていると11月19日に、厚労省の対策本部から「施設等の入所者又は介護従事者等で発熱等
の症状を呈する者については、必ず検査を実施すること」との通知が出、翌日には厚労省の障害福祉課から「保
健所による行政検査が行われない場合に自費で検査を実施した場合、県や指定市は新型コロナウイルス感染症
緊急包括支援交付金を活用する」との、失礼ですが、まっとうな事務連絡ができました。

お金と社会システムの無駄遣いにならないように、是非とも安心できる政策が行われることを祈っています
(12/8)。

社会福祉法人 神戸聖隷福祉事業団

常務理事 吉田 和夫

神戸聖隷にご寄付をいただきました。

(敬称略・順不同)

皆様のご支援に
感謝申し上げます。

10月 9月 8月

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-----|------|------|------|-----|------------------------|--------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|-----|------|
| 水野雄二 | 高本清二 | 柴田江子 | 植戸貴喜 | 安井正映 | 濱田純子 | 武田純子 | 豊田成己 | 米田紘正 | 石原昇 | 平原貞雄 | 政田一穂 | 杉本一穂 | 松井恵 | OfficeM
社会保険
労務士 | 美濃部多果子 | 藤井正雄 | 野口和泉 | 田島康啓 | 金附洋一郎 | 岡田安津子 | 大谷節子 | 森山礼奈 | 藤井裕子 | 栗原聡子 | 恒田徹 | 西村武男 |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-----|------|------|------|-----|------------------------|--------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|-----|------|

利用者(障害(児)者・高齢者)の一層のサービス向上に資するため、法人は皆様のご寄付をお願い申し上げます。同封の振替用紙をご利用ください。

ご寄付のお願い



(Mさん10月某日)

去年のイースター直前の水曜日のこと。神戸愛生園の玄関近くで、利用者のMさんに手招きをされました。何でしょう?と伺いましたら、下げておられた小袋の中にある何かを出してほしいとのことで、袋の中身を1つずつ確認したら、とある少し茶色くなった紙を「それだ」とお示しになり、iPadに打ち込まれた文字を拝見すると「礼拝のメッセージで使ってほしい!」と。そこでその茶色くなった紙を開いて見てみたら、ご自身作のこのような詩が書かれていました。

「病院」

僕は天国の入り口を見たよ／そこには閻魔さまがいたよ／閻魔さまは僕に帰れといったよ／
何がなんだか分からないまま かすかに僕を呼ぶ声がある／そのうちに意識が少し戻ったのか／Oさんの顔が見えてきた／
ああここは病院だった／
Oさんありがとう

※熱が高く、救急車で日赤に行き、意識が回復したときのこと、1989年6月

これを礼拝メッセージで使ってほしいというのは、何を思われてのことですか?とご本人にお尋ねしたところ、イースターは復活の日だ、自分はあのとき死にかかった、でも生きる世界に戻ってきたということを言ってほしい、とのことだったのですが、好きなように「お料理」してもいいですかとお尋ねしたら「オッケー」とのことでしたので、ひとまず預らせていただくことにしました。その後、何度も読み返す中で、じわじわと染みてきたのは、まず「かすかに僕を呼ぶ声がある／そのうちに意識が少し戻ったのか／Oさんの顔が見えてきた」というところでした。Oさん(当時の職

牧師 Message

呼ぶ声がある

日本基督教団 神戸愛生伝道所 竹内 富久恵

員)がMさんの名前を呼んでおられる様子や、Mさんが意識を取り戻されてOさんの顔が見えてきたときの様子が、ありありと浮かんでくるようでした。そしてそうやって意識を取り戻されたMさんは、「Oさんありがとう」という言葉でこの詩をしめくくっておられます。自分のそばにいて、私の名前を呼んでくれていた、思いを込めて呼んでくれていたことを感じながらの「ありがとう」なのだと思うと、その関係や、その場面、そこにある心、想像されてくる全部が、とても味わい深く感じられたことでした。

「名前を呼ぶ」というのはかなり日常的、そして根源的なことですが、そういう日常的かつ根源的なことなかで、大事なものは生まれ、つながっていくのだと、Mさんの詩、そして「わたしはあなたの名を呼ぶ」との聖書のことば(イザヤ43:1)を重ねあわせながら考えさせられています。しばしば言われることですが、非常時や緊急時に問われてくるのは、日常性そのものです。そして非常時や緊急時というのは、ふだん意識化していない日常のあれこれを問い直される機会ともなりますが、「神によって名前を呼ばれているその一人」としてお互いに日々を過ごしているかどうか、問われていると同時に、そのようにして「名前を呼び呼ばれる」日常こそが、それぞれの人生を支えているのだということを確かめさせられる思いがしています。

「何がなんだか分からないまま かすかに僕を呼ぶ声がある／そのうちに意識が少し戻ったのか／Oさんの顔が見えてきた／ああここは病院だった／Oさんありがとう」そんなふうに、相手の存在を思う気持ちで名前を呼ぶ、ということからつながっていくものがあり、そこからまた生き始めるということも起こりえる、その神の働きの中に生かされる者であれたらと願います。